Kiyo Muraguchi Women's Clinic

きよくり news

VOL 27
2013.3 発行

Muraguchi Kiyo Women' s Clinic

CONTENTS

・震災2周年のときに
・思春期セミナーに参加して
・私のオフタイム
　～おのくんとの出会い～

「震災 2 周年のときに」

東日本大震災復旧復興宮城県民支援センター事務局次長
坂総合病院名誉院長　村口　至

被災した門脇小学校の校庭に咲くひまわり

大震災から 2 周年です。 仙台の周辺から、 瓦礫の山は消えましたが、 石巻や南三陸など仙台から離れるにつれ大きな瓦礫の山に出会います。 悲しいことですが、仙台平野は一望のもとに見渡せるようになりました。 南三陸では、さすがに漁網や漁具が覆いかぶさっていた建物からそれらは取り除かれていますが、 使えなくなった建造物は未だ放置されたままです。 仙台では見かけなくなった光景であるダンプや大型工事車が繁く行き交っています。 この復旧工事の遅れ、 地域格差はなぜだろうか、 当然なのだろうか。 仙台より人口が少ないからか、 経済活動が低いから当然なのだろうか。 マスコミは復旧工事の職人が足りないと伝えている。

復旧工事の遅れは、 元来過疎地であっただけに、 更に人口の流出を促進させるに違いない。 三陸沿岸の貴重な水産資源の復興は、 日本の食料自給にも関わってくる話だ。

もしこれが、 人命にかかわることだったらどうであろうか。 自らに引き寄せてみるとゾッとする。 “命に格差” をつけられていることに誰も無関心ではいられないだろう。

3.11 の大震災は、 都市部にも沿岸の農漁村にも等しく壊滅的打撃を与えた。 多くの人々に耐え難い避難所生活や今なお応急仮設の生活を強いている。 一方で、私や私の家族を始め、震災の被害をまぬがれた多くの県民がいる。 “ゼロ” いや “マイナス” からスタートしようとしている人々に対して私たちができることはなんだろうかと考える。 具体的な支援と共に、 現在と近未来の社会の有り様を考察することも大切と思う。

いま、「宮城県第6次地域医療計画」が検討されている。 そこでは、 現在ある7つの2次医療圏を4つの医療圏に減らすというものだ。 具体的には、 気仙沼と登米地区を石巻圏に、 栗原を大崎圏にそれぞれ併合する。 これには、 気仙沼始め併合される自治体は声を大にして異議を唱えている。 しかし、 県の医療審議会は2月 14 日強行に決定してしまった。 2次医療圏とは何か。大学病院のような、 特殊で高度な医療（第3次）を除き、 その圏域で完結できる医療機能を備える水準をいう。 その水準を県の責任で整備するというものだ。つまり、併合される3つの地域に対して、県は2次医療水準の整備責任を放棄したということになる。結果として、 被災地の人々は、 必要な医療を遠くへ引き離されたということだ。 気仙沼の方々が石巻日赤病院まで通院することを日常的に想像できるだろうか。 厚労省は、 2次医療圏見直しを全国に求めているが、被災3県は除外容認としているのになぜ宮城県は強行するのか。 全国で、 2次医療圏を減らしたのは、 徳島県と本県のみである。

瓦礫処理での地域格差と同じことが、 医療圏設定では、 宮城県の「意志」で格差を“固定” する作業を行なったと言える。 震災復興に当たり、県知事から出る言葉は、「合理化」「民間活力」「国際競争力」である。 それらは、果たして「県民」のためなのか、耳目を鋭くし、 復興過程を考察し、 県民の声を世に大きくしなければと思うこの頃です。

南三陸町の今

思春期の問題は増える一方、まずは正しい知識を得て

看護師　早坂　恵

『思春期保健相談士』という資格があることを、私はクリニックに勤務するまで聞いた事がありませんでした。思春期は、身体的にも精神的にも成長していくとても大切な時期です。しかしその時期は、成長ゆえに悩んだり、時に様々な問題に直面してしまうことも多くあります。そんな思春期の様々な悩みに応えられるようにと、昭和58年から『思春期保健セミナー（日本家族計画協会）』が開催され、現在全国に約 8,000 名の『思春期保健相談士』が誕生し、様々な現場で活躍されているそうです。

そのセミナーに、昨年の夏と秋と冬の 3 回にわたり、それぞれ東京で 2 泊 3 日で参加してきました。参加された方の職種は様々で、医療従事者はもちろんのこと、養護教諭など思春期に関わるたくさんの方々が参加されていました。セミナーは「総論編」「各論編」「実践編」と進んでいきました。「総論編」と「各論編」では思春期における身体的変化や精神的変化にはどのような事があるのか？取り巻く社会生活や家庭生活はどのような影響を及ぼすのか？各分野の専門の講師の方々の、とても興味深い講義を受けました。「実践編」では、ホテルで合宿のような 2 泊 3 日の生活を送りました。二人一部屋の部屋割りはセミナー主催者が決めたもの。食事の際の座席はくじ引きで・・・。机の上の勉強ではなく、人と人との交流を通じて、感じたり考えたりする学びでした。最終日にはグループ毎に与えられたテーマに沿ったロールプレイングを発表し合いました。看護学生に戻ったような気持ちになり、とても新鮮な気分になりました。

今回セミナーに参加し、改めて思春期に抱える問題が多いことを知りました。そしてそれは様々なことが影響していることが分かりました。さらに近年では、インターネットの普及により新たな問題も出てきています。たくさんの情報の中から、正しいものはどれなのかと判断する力も必要とされるようになり、思春期の問題は増える一方だと感じました。

私事ですが、13 歳と 11 歳の思春期真っ只中！？の息子がいます。母同士の会話の中でも、思春期にまつわる内容が、最近は度々出てきますが、そんな中で、皆さんが聞くに聞けないのが性の問題であると感じていました。正しい知識を知りたくても、なかなか知ることが出来ない現状。性の問題については、正しい知識を得ることが最も大切なのだと、今回のセミナーで実感しました。思春期保健相談士の認定を受けた今、まずは息子を観察（笑）そして、身近なところや、もちろんクリニックで大いに役立てていきたいと思っています。

講師の特別発案で夜の街へ
ロールプレイの仲間ともんじゃ焼きで打ち上げ

私のオフタイム
～おのくんとの出会い～

看護師　小野真理子

震災から2年、初めて被災地を訪れました。きっかけはある新聞に掲載されていた‘おのくん’です。‘おのくん’とは東松島市「小野駅前応急仮設住宅」の人々の住処・奥松島の復興を願って生まれたキャラクターです。（元祖は支援者が教えてくれた、アメリカの貧しい労働者階級のお母さんが、子供にプレゼントするために、お父さんの靴下を改良した‘ソックスモンキー’です）

同じ姓でもある私は、不思議と縁や親しみを覚えました。

仮設住宅の一角にある集会所で‘小野のおかあさん達’が希望を持ちながら一つひとつ手縫いしています。今では全国はもとより、海外からの注文も。自治会長で代表でもある武田文子さんから、数々の貴重なお話も伺いました。震災後の状況、津波の被害にあった方々を救おうと必死に行動した小・中学生の小さなヒ-ロ-達、仮設での人々の生活について、いち早く取り上げたメディアは地元では無く岐阜の新聞社であった事…等々。真冬の底冷えする仮設でも‘おのくん’を作っている‘おかあさん達’のおしゃべりに暖かさを感じます。武田さんは「おのくんを通して、是非この仮設に一人でも多く足を運んでほしい」と願っています。‘おのくん’や‘小野のおかあさん達’との出会いから、改めて復興とは何か、自分に出来る事は何か、を考えるよい機会になりました。

臨時休診

5月2日（木）から
9日（木）まで休診に
なります。

編集後記

久しぶりに「きよくりNEWS」の編集に関わりました。私事で昨年はしばらくお休みしておりましたが、春から少しずつ復帰させていただきますのでどうぞよろしくお願いいたします。　柴田 ☺

発行元：村口きよ女性クリニック
http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp
e-mail:con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp